

「水槽のカイミジンコ」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

「メダカのエサはペットショップで買うもの」と子どもたちは決め込んでいる。しかし、池や川に住んでいるメダカは、人間にエサをもらうことはなく、自力で生きている。生きているということは、何かを食べている・・・ということである。しかし、そんな当たり前のことが、子どもにとっては、なかなか実感できないのだ。そこで、私はこんな投げかけを試してみた。

T:「ここに水槽があります。中にはメダカの稚魚約30匹入っています。孵化して、もう2週間たちますが、みんな元気です。」

C:「エサは、毎日あげていたんですか?」

T:「実は、一回もあげていません。」

C: (マスオさんのような声で)「え? え～～!」

T:「さて、何を食べていたのでしょうか?」

C:「孵化した時持っていた、黄身(=卵黄)。」

C:「中にある、モ(=藻)。」

C:「プランクトンだよ、プランクトン!」

「小さいメダカたくさんいる～。かわいい～。」

「もう栄養(=卵黄)はなくなってる。」

「水面らへん(=水面の近く)で、何か食べてるみたいだよ。」

「底らへん(=水槽の底)をつついてる。金魚と同じことしてる。」

「あ!何か黒い、小さいのが泳いでる。はやっ!」

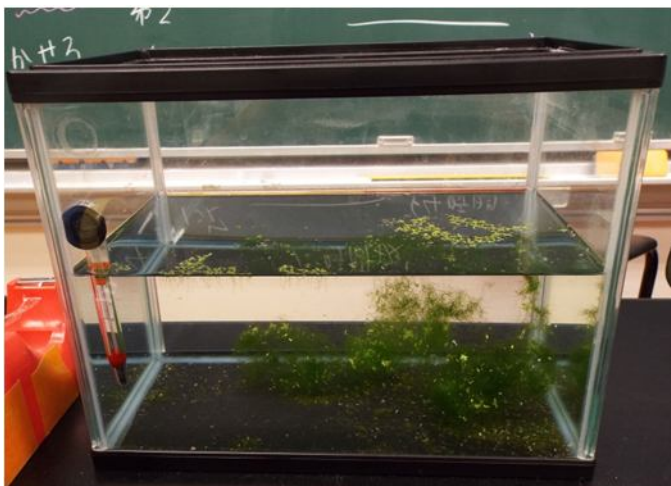
「どこどこ?あ!ホントだ!いる!」

「これって、プランクトン?」

「プランクトンなんか、肉眼で見えるわけがない。」

「あの黒いヤツ、顕微鏡で見たい!」

実際に、教師が期待する理想的な展開になった。さっそく、水槽の中にある「謎の小さくて黒い動くヤツ」を顕微鏡で観察してみた。メダカの稚魚も素早しっこい(すばしっこい)のがだ、この黒い生物も、負けないうらい泳ぐのが速い。子どもたちはスポイトで捕まえるのに、非常に苦労していた。



「稚魚専用の水槽」 校庭の池の藻や底の泥を入れてある。孵化から2週間、エアレーションや給餌は一切していない。文字通り、世話いらず。理科室に置いてあって、休み時間でも観察できるようになっている。

まずは、この水槽に目を近づけて、よく観察させてみることにした。



動きや基本的な形態はミジンコに似ているが、これはミジンコではない。カイミジンコ(貝微塵子)と呼ばれる動物性プランクトンの一種である。二枚貝のように、半透明な殻に体が挟まれている。ミジンコは、頭部が殻の外に出ているが、カイミジンコは頭部も殻の中なので、常に楕円形に見える。またミジンコは、触角が枝分かれしている種類が多いが、カイミジンコはそれもない。しかし、スライドグラスとカバーグラスの間のわずかなすき間でジタバタと動くので、顕微鏡をのぞく子どもたちは、大興奮であった。